

成果報告書

記入日 2025年 2月 8日

フリガナ：(イワタカズマ) 氏 名：岩田和馬	渡航先国名 トルコ共和国	留学先の所属機関：ボアジチ大学 帰国後の所属機関：東京外国語大学
研究テーマ：18 世紀オスマン朝イスタンブルにおける船着場の社会構造分析		
研究期間：2020年 11月 ～ 2023年 1月 (2年 2ヶ月)		
研究成果 (概要) イスタンブル、アンカラ、ソフィアの文書館から収集した多様な史料の分析を通じて、18 世紀イスタンブルの船着場を基点とした社会経済構造の分析を行った。これにより、前近代イスタンブル社会経済構造の未解明の部分に光を当てることができた。		
研究成果 (詳細) 今回の渡航で得られた成果は、主に大統領府オスマン文書館、イスラーム研究センター、ワクフ総局中央図書館、ソフィアのキリル・メトディ図書館における調査を通して収集された史料群である。史料調査では研究テーマに即して、主に船着場周辺で営業する同業組合と周辺の都市空間、さらに船着場が つなぐイスタンブル内外の社会経済関係を分析した今回の調査では、上記の分析に必要となる史料群を収集した。具体的には、同業組合内部の階層構造や営業形態などを明らかにすることができるイスタンブル諸法廷台帳や、勅令を収録したアフキヤーム台帳、イスタンブルの同業組合などを対象として作成された保証人台帳、大宰相府などによって作成された書類、イスタンブルに数多く存在していたワクフ物件に関する文書や台帳といった史料を収集した。また、これらと並行してイスタンブルの古地図などを収集した。 主な史料 A) 木炭商人に関する史料 今回の調査で収集できた史料の中で特に注目に値する史料は、まずイスタンブル諸法廷台帳に収録される木炭商人組合に関する幾つかの記録である。これまで前近代イスタンブルの木炭流通に関する分析は、主にアフキヤーム台帳や行政機関によって作成された文書を利用しながら行われてきた。これらの研究は主に木炭の流通構造に着目して行われてきたため、その流通に直接関わる木炭商人などの業者に関わる分析は最低限にとどめられてきた。今回収集した法廷台帳の分析を通して、これまでのところ、イスタンブル各所の船着場周辺で営業していた木炭商人の分布や同業組合内部の規則、組合長など幹部の役職や在任期間といった情報、組合を構成する人々やその周辺の人々の関係、イスタンブルの木炭商人と生産地、中継地点の人々との関係、木炭商人の営業の中心となる木炭倉庫の所有構造や営業における位置付けなどを明らかにすることができた。		

B) イスタンプルの古地図

前近代イスタンプルの詳細な地図は 18 世紀末に至るまで作成されることがなく、19 世紀においても通りや街区の名前などの詳細情報を含むものは少ない。これらの古地図の多くはイスタンプルのカラキョイに位置する SALT 図書館において収集することができる。特に、1918 年に作成されたネジブ・ベイの地図のオスマン語とフランス語の両バージョンを SALT 図書館で収集することができたことは大いに意義があったと考えられる。一方で、イスタンブル内部の通りの名前などは 50 年代に至るまで基本的に前近代の街区名をそのまま流用しているものが多い。ネジブ・ベイ地図のデータは細かい文字などを判読することが困難である場合もあるため、これと併せて共和国初期に作成された地図を購入した。これらの地図を利用することで、前近代の文書で言及される街区や現存しない船着場などの位置の特定が可能となった。

C) 1863 年の通行手形群及びキリル・メトディ図書館所蔵の史料

ソフィアのキリル・メトディ図書館で収集した 150 枚に及ぶイスタンブル内部で利用されていた手形群 (Φ., 1A. 18770) は、多くのもがイスタンブルで営業する荷役人に属するものである。この史料は 18 世紀とは経済統制や社会統制のあり方が大きく変わった時代のものであるが、手形を所有する人物の特徴や出身地などが記載されており、前近代の荷役人に関する史料と併せて分析することで前近代から近代にかけての移行期に荷役人などの労働者の出身地などが変わったのか、もしくは変わらなかったのかという分析が可能になると考えられる。

これ以外には、基本的にイスタンブルの大統領府オスマン文書館に所蔵されるものと同類の史料をいくつか収集した。これらの中から不完全ながら捺染工組合の名簿なども発見することができた。これらの史料は 18 世紀イスタンブルの社会経済に関するものであり、トルコ国内で収集した史料の分析の補助として利用することができると考えられる。また、これらの史料は地理的な制約からトルコ国内ではあまり利用されていないため、新奇性のある史料であると言えるだろう。

D) 1753 年の荷役人名簿台帳 (BOA., AE. SMHD. I. 16498.)

イスタンブル荷役人の名簿はこれまで、法廷台帳に記載された 1724 年と 1792 年の保証人台帳が確認できており、先行研究でも利用されてきた。今回の史料調査でさらにもう 1 つ荷役組合の名簿を新たに発見・収集することができたため、背負子荷役組合と馬方荷役組合という 2 つの同業組合の構成員数の変遷や、営業地の拡大といった経緯をさらに詳しく分析することができるようになった。

E) 船着場の管理、修繕に関する史料

大統領府オスマン文書館が収蔵するイスタンブルの船着場の修繕に関する史料は、点数は多くないものの修繕に至るまでの事情や、修繕に必要な物資の内訳、担当する部署などの情報を含む。これらの史料からはイスタンブルの船着場の有する特色や、管理の体制などがわかる。通常の船着場には、イスケレ・エミニと呼ばれる役人が置かれていたが、イスタンブルの船着場は主にイスタンブルの海浜部を管理するボスタンジュバシュの管理下にあった。さらに船着場そのものはイスタンブルのその他の建物と同じくミマールバシュによって管理されており、船着場が損壊した場合はミマールバシュの検分を経て国庫から修繕費が支払われた。一方で、特定の同業組合や集団が無理な利用をして船着場を破損した場合は、責任の所在が法廷などで争われ、修繕の責任を持つとされた民間の集団が修繕費や清掃費を支払った。このことから、基本的に日常的な管理は船着場を中心的に利用する集団が管理している一方、公的な管理はボスタンジュバシュやミマールバシュなどの役人の手に委ねられていたことがわかる。

F) チョルル・アリ・パシヤ・ワクフの諸施設に関する史料

チョルル・アリ・パシヤは、アフメト 3 世期の 1706-1710 年に大宰相を務め、イスタンブルにモスクや商業施設などを建設したことで知られる。現存している主な建造物は、ファーティフ地区と海軍工廠に建設された 2 軒のモスク、金閣湾近くのケレステジレル通り建設されたハンと呼ばれる商業・宿泊施設がある。これらの施設はワクフによって管理され、このワクフによる施設への管理体制を分析することは、18 世紀イスタンブルにおけるワクフの社会経済的機能を実証的に明らかにすることにつながる。特に海軍工廠内のモスクには救貧施設が併設されており、これを分析することで前近代から労働者が多数居住していた周囲の街区における救貧のあり方を明らかにすることができる。

G) 供給・穀物・同業組合・市場統制台帳 (BOA.,A.{DVNS.TZEİ.d.)

この台帳群は、1740-1836 年の間に作成された台帳群であり、それぞれの台帳ごとに供給・穀物・同業組合・市場統制という大きな括りに分けられている。同業組合の台帳は 1820-1826 年という経済統制のあり方が近代化していく移行期の史料であるため、前近代の同業組合を分析する上では直接利用することはできないものの、18 世紀から移行期への展望を見ていく上で重要な史料である。形式はアフキヤム台帳に収録されている記録と基本的に近いが、アフキヤム台帳の記録を補完する形で利用できると考えられる。

史料の利用と研究成果

今回の調査では、上述の A)~G) の史料群以外にも多様な史料を収集することができた。これらの史料から、研究計画書で述べたように各種同業組合の持つ社会経済関係や内部の独自の階層構造を明らかにすることができた。さらに、都市空間の分析において、船着場の修繕に関する史料を利用することで、船着場が行政によってどう管理されているのかを明らかにすることができた。また、船着場周辺の商業地区の分析は、店舗のリストなどと並行して都市労働者の多くが滞在していたハンの分析を行うことで、船着場を中心とした空間がどう構成されていたのかを、そしてこれらの人々を労働の側面のみならず生活の側面からも捉えることが可能になる。このトピックに関しては現在、ハンの住民と管理人、大家の関係を扱う論文を執筆している。また、タバコや木炭といった、外部から輸入され都市で消費される商品を取り巻く人々の関わり方の分析をおこなっており、特に木炭に関しては上述した通り木炭商人に着目をして、木炭の流通構造を統制する政府の視点ではなく、そこに直接関わる人々の視点から木炭流通構造を捉え直すことを試みている。この分析の成果として、現在イスタンブル研究センター (İstanbul Araştırmaları Merkezi) の出版する *Yıllık* への投稿を目標として論文を執筆している。

これら 2 本の論文の他に、現在木炭商人とタバコ商人が利用し、船着場周辺に建設された倉庫の所有関係や利用の方法、ゲディキと呼ばれる営業権と倉庫所有もしくは占有の関わりを分析することで、これまで多方面から分析が行われてきており、その性質や時代に応じた変質が明らかにされてきた。木炭商人とタバコ商人と倉庫の関わりを実証的に分析することでこれらの議論への貢献が期待できる。

さらに収集した史料の分析を進めることで、18 世紀イスタンブルの船着場を基点とした都市社会及び、都市とその周辺の間をより詳細に明らかにしていくことができる。また、上述した同業組合の分析を行うことで、前近代イスタンブルの労働社会と、19 世紀にかけて近代社会への移行への展望を示すことができると考えられる。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中の生活は主に文書館や図書館での史料収集とイスタンブルの歴史地区の巡検に時間を充てた。史料収集と分析に関しては、渡航当初施設の利用時間が制限されていたため、限られた時間の中でのなるべく多くの史料を収集し、取得後に自宅で翻刻と分析を行うという形で調査を行った。コロナ規制が終了した後も、基本的にはこの方法で調査を行っており、結果として関連性の低い史料を取得するという事態も発生したが、中には思わぬトピックにつながる史料もあり、今後の調査で取得する史料と併せて別のテーマに発展させることができると期待できる。

また、研究テーマがイスタンブル史であることもあり、地理感覚をつけるために、イスタンブルに現存するオスマン帝国時代のモスクや商業施設などを訪れるように務めた。これまで史料や二次文献で学んだ情報として知っていた各種建造物に直接訪れることで、多くの発見を得ることができ、史料読解における理解に非常に役に立ったと考えている。また、ファーティフ地区に現存するオスマン帝国期から続く商業地区においては、現在も無数の商工業者が形を変えながらも、人的コネクションや独自の利権構造を保持しながら営業する前近代的な営業形態を保っている様を観察することができ、非常に興味深かった。

また、イスタンブルは現在世界各地からの大規模な移民の流入を経験しており、社会のデモグラフィの変質を経験している。イスタンブルはオスマン帝国による征服以来、絶え間なく移民を受け入れながら成長してきた都市であるという事実を鑑みるとこのような流れはある意味歴史の当然の帰結とも言えるが、現在のイスタンブルが経験している移民の規模は歴史上最大のものであることは確かであろう。移民の多い地区を訪れることで、日本にいるよりもより身近に世界の情勢を感じることもできたことは大きな経験となったと思われる。



現在のトルコは未曾有の経済危機に見舞われており、政治的状況も非常に困難を極めている。こうした状況の中での生活は、物価上昇などの影響を受け時に困難を伴うこともあったが、このような混乱の時期にトルコに長期で滞在できたことは、トルコ社会を学ぶ上である意味非常に有用であったようにも思われる。現在トルコは建国 100 周年をひかえる中、エルドアン政権のこれまでを総括する選挙が行われようとしている。そんな中発生した今般の南東部における大震災によって今後の政治的な見通しはさらに不透明なものとなったと言えるだろう。このような現在の状況がトルコ社会に今後どのような影響を与えていくのか、そしてそれがイスタンブルの景観や社会構造に影響を与えていくのか今後も見守っていきたい。



今後の社会貢献

今回の留学中に、トルコでネットメディアの編集を行う友人からイスタンブール研究の知識と日本で生活してきた知識を合わせた記事を執筆する依頼を受け、数十年前から日本の右派論壇を中心にまことしやかに囁かれてきたイスタンブールに存在すると言われる東郷通りとそこから派生したいくつかの都市伝説の非存在を、調査を通じて取得した史料と、研究を通じて獲得した技術を利用しながら論じ、どのようにしてこの都市伝説が日本の右派イデオロギーと結びついてきたかを明らかにした。フェイクニュースなどが大きな影響力を持ち、情報の正確性への重要性が特に関心を集めている近年において、数十年にわたって日本社会を循環してきた都市伝説を実証的に否定できたことは、日本の言説空間において一定の貢献をすることができたと考えられる。

今後の社会貢献としては、今回の留学で培った歴史学的な技術のみならず、イスタンブールにおける土地勘や今回の留学でできた人的コネクションから得られたものを今後は社会に還元していきたいと考えている。今後も上記の事例のように思わぬ貢献ができる可能性があるため、さらに研鑽を重ねていきたい。また、研究面では前近代社会イスタンブールの労働社会と都市社会の研究と、地域の近接分野の研究を行う研究者との比較研究を通じて、現代の資本主義社会を生きている我々の社会を捉え直す一助となるように努力したい。